



## 鴨涯閑話

### 豊竹古鞆太夫

私は東京の生れですが——十二歳の時に淨瑠璃修業に大阪へ出て、十四歳の時母が病氣で一旦東京へ歸りました。が、十六歳の時再び大阪へ出て、それから今日まで、とにかく世間から何とかいはれるやうになるまでには随分いろ／＼な事がありました。省みると長い月日でした。私は今年六十九歳になるのですからな。

思ひ出すことは數限りもありませんが、おこがましい藝談などはぬきにして、夜長の茶のみ話を二つ三つ拾つて見ませう——といつて私は今も申したやうに、五十餘年間義太夫節以外には一歩も出なかつた全くの世間知らずなんです。ですから、結局話は藝の事に落ちつ

くのはやむを得ないとお許しを願ひます。



私は鏡山の長局などを語るといつても思ひ出すことがあるのです。それは明治二十五年、私の十五歳の時です。當時私は前に申した母の病氣で東京に歸つてゐたのですが、播磨太夫さんの座へ入つて二枚目が綾瀬太夫、私が三枚目で淨るりを語つてゐました。ちやうどその時、有栖川の宮さまのお邸へよばれて綾瀬が忠臣蔵の九段目、私が日吉丸の三段目を語つておきゝに入れたのですが、その時の宮家の御殿の様子といふものは全く長局をつくりなで驚いてしまひました。長いお廊下が

あつてぼんぼりが並んでゐる。廊下に添つて女中衆の部屋があり、どの部屋にも立派な長持がすはつてゐる。女中衆は芝居で見るそのまゝ、きれいにお化粧をして、高島田に矢の字の帯、詰所があつて、そこで大勢謂ゆる御殿火鉢を前にして行儀よく控へてゐる。無論さうした中には、尾上や岩藤をそのまゝに思はせるやうな方がゐられるのだから、子供の私にしては全く夢見る心地です。そのうちに小用を催してお厠へとびこんだのはいゝが、子供の事ですから、中が薄暗いまゝによく見きはめもせず、便器に立派な黒塗の蓋のしてあつたの知らずにジャア／＼とやつて大失敗をやりました。下司の生れはやはり下司だとその時ばかりはさすがに子供ながら恥かしく思つた事です。



◆ 今の話の、私が東京で世話になつた播磨太夫さんに思ひ出があります。こ

の人は立流な樺の見臺を持つてみました。この見臺は竹本山城椽の看板をきつて作つたもので山城椽と申すのは、私の師匠二代目津太夫の師匠に當る人です。この人は謂ゆるチャリ語りで有名な太夫で、話題の看板は三國無双滑稽物語、竹本山城椽藤原兼房と書いたぶ厚な非常に立派な一枚板であつた所から、六代目綱太夫が之を任立かへて

見臺に作らせたもので、それが播磨太夫さんの手に渡つてゐたのでした。私はよくこれを拭き磨かされたものです。播磨太夫さんはよく冗談に、俺が死んだらこの見臺は誰が持つだらうな、お前が持つやうになつてくれやうかな、などといつておました。ところがその死後は淨瑠璃に縁のない播磨太夫の弟さんの手に渡り、それから轉々の方々へ流れて行衛不明になつてしまひました。それから何十年かたつた大正十二年私は偶然にも東京で、ある私のひいき先の家にそれがあつたのを見つけ

ました。思ひ出の見臺ですから私はまるで死んだと思つた人にもめぐりあつたやうな氣がしまして、早速それを譲りうけ、昔、播磨太夫さんが「お前がそれをもつやうになつてくれやうか」といつた言葉を實現したつもりで秘藏にしてゐましたが、今度の戦災で焼いてしまひました。惜しい事をしたと思ひます。

惜しいといへばこの戦災に私は見臺を二十三焼きました。その中には三代目綱太夫の使つてゐた岸駒の下繪のものもありましたが――

◆  
求めてゐたものが偶然に發見される興味といふものは全く金錢にかへ難いものがありまして、私の蒐集癖なども何も私が學者や物知りになりたいためではありません。

昔から名ある太夫が金に困つて自分の語り物の中でも極めのついたものを質に入れる話がよく傳へられてゐます

が、實際にそんな事があつたものかどうかと思つてゐたところ、事實あつた證據を見つけて非常に面白く思つたとがあります。それは六代目綱太夫が、花雲佐倉曙。――佐倉宗五郎の淨瑠璃です――その中でも牢屋の段を淺野常次郎といふお仕打に質に入れて金三十兩借つたのですが、その借金のある間はこれを他では絶對語らなかつたのです。これは私がある古本屋から綱太夫自筆の奥書のある床本を見つけて買ひとりましたが、その中に綱太夫から淺野へ入れた借金の證文と淺野から綱太夫へあてた返り證文が、各々一枚宛はさんであつたのでそれとわかつたのです。

この借金は無事にすましたものと見えて、明治六年の竹田の芝居で牢屋を出してゐます。その番附も偶然手に入りましたので床本證文と一しよに珍藏してゐましたが、これも戦災で焼いてしまひました。

◆ 大夫修業にいろ／＼な苦しい目、つらい目のあることはいふまでもありませんが、それだけにまたうれしい目をした事も忘れません。その中でも私の生涯忘れられないのは、何といつても攝津大様の端場を語らせてもらふやうになつた時の事です。

明治四十一年の十一月の興行に日蓮記の通しが出まして、私の師匠（二代目津太夫）は彌三郎内の段を語つてゐましたが、私がまたその端場を語らせてもらつてゐて、舞臺に出てゐるうちに、師匠が腦溢血で樂屋で倒れてしまひ大騒ぎになりました。突きの事で代り役も何も都合がつきませんから私が舞臺から引こんだまゝの姿で、友次郎さんの三味線で御簾うちで師匠の語り場を代役しました。幸ひ大過なく、これ勤まりましたので引つゞき三日間この代役を致したのが認められ、翌四十二年一月の興行に櫓下の攝津大様の端

場を語ることになつたのです。その時の大様の出しものは紙治の河庄でした。そしてその年の四月に文樂座は植村さんから松竹さんへ經營が移つたのです。その時私は古靱大夫を襲名し仙代萩の竹の間をうけもちました。

◆ 古靱といふ名はあまり縁起のいゝ名ではありません。御承知の通り先代古靱は明治十一年二月、つまらない行きちがひから人に殺された非運な人で、そのあと名を襲ぐものがなかつたのを私がついだのですが、これには少し事情もありました。大體は師匠の津太夫を襲ぐ話にもなつてゐたのですが、津太夫の名は濱太夫が襲いでしまつたものですから、私は誰もつぎ手のない古靱の名を、先代の死後三十二年目に襲いだわけです。そんな縁起の悪い名をわざ／＼襲がなくても、といつたやうな聲もないではありませんでしたが、清六さんが私の三味線を弾いてくれる

ことになつたのですからそれとときめてしまひました。といふのは、初代の清六は古靱の先々代靱大夫をすつとひいて居り、靱大夫の死んだあと、更にその衣鉢をついだ先代古靱をひいてゐました。そしてその初代が病氣で引退したあと、二代目をついだ清六がまた古靱をひいて居りまして、古靱と清六の關係はひどく因縁の深い事になつて居たので、今の三代目清六が私をひく事になつたのだから、今度は私の方から古靱を襲名したといふわけです。

因みに申しますが、前にいつた靱大夫の衣鉢をついだ人が古靱と名のつたのには事情がありました。この人はほんたうなら初代のあとをついで二代目の靱大夫を名のらねばならぬ人なのですが、之の二代目靱大夫の名は、いろ／＼な情實から自分より後輩の富士太夫といふ人につがれてしまつたので、大に憤慨し、俺は今の靱大夫より古いといふので古靱といふ名をこしらへて

名のつたといひます。

私が二代目古靱になるまでの名は若い方は御存知ないかも知れませんがつばめ大夫といひました。この名も別人誰から貰つたわけでもなく私独自の名のりです。大體私は初めから淨瑠璃大夫を志したのではなく、幼少の時分は俳優になるつもりで片岡仁左衛門さんの弟子になつて居りました。この片岡仁左衛門といふのは此間入手にかゝつて非業の最後を遂げた仁左衛門さんの父に當る人で、今の我當のお父さんであつた十一代目仁左衛門のもう一つ前の十代目仁左衛門です。私はこれでも四五歳の頃から十歳頃まで子役で芝居へ出てゐました。そして俳優になるのには義大夫の稽古をせねばならぬといふので、淨瑠璃の稽古を初めたのが到頭俳優を廢めて大夫になる奇縁となつてしまひました。それで、私が十二歳の時東京から大阪へ來た時に頼つて

來た家は、仁左衛門さんの縁で、その頃阪町に住んでゐた片岡我當、即ち今の我當のお父さんに當る方の仁左衛門さんの宅で、そこで大夫になりたい志望を話すと、我當さんは、それならちやうど近くにいゝ大夫があるからといふので、頼んでくれたのが法善寺の師匠、即ち二代目津大夫です。弟子入をして、さて何といふ名にしようかといろ／＼考へてもらひましたが、ちやうどその時師匠のひいきで、道修町で肝龍園といふ藥の本舗をして居られる堀勝藏といふ人、自分でも勝好と名のつて素人淨瑠璃を語る方が見えてゐて、それちや仁左衛門の俳名芦燕に因んで、つばめと名のつたらよからうといふことになり、それには津大夫の津の字をもらつて津葉芽大夫と書くことにきまりました。津葉芽といふ字はあんまり堅苦しいので後にはやはり、つばめと假名でかくことにしましたが、それ以來私は古靱になるまでずつとつ

ばめ大夫で通して來ました。一生のうちで何度となく名をかへたり襲いだりする人が昔からよくありますが、元來變屈は私にはそれが出來ません、子供の時から一人前になるまで一本の名で通し、一人前になつて由緒のある名を襲いだからにはこれ亦私の死ぬまでかへたりなどしないつもりです。尤も私の今の名は前にも申した通り、世話になつた師匠とはまるきり縁のない名で、私としては師匠が後につがれた七代目綱大夫のあとをついで八代目綱大夫にならなければならぬ義理合でもあり、また實際、綱大夫の名は私が預かつてゐるので、その氣もないでもなかつたのですが、ある人にそれを話すと、それはいけない。先代の古靱といふ人は六代目綱大夫と至つて仲がよく兄弟のやうにしてゐたが、綱大夫は古靱を兄きと呼んでゐた。その古靱の名をついだ君が、弟分の綱大夫になつては格下げだといはれたことがあります。そ

んな事はどうでもいゝとして、私が綱太夫になつては、今度は古靱の名の行方困つてしまふ。因縁の深い三味線の清六との關係も無意味になるので、私は生涯古靱で通すつもりです。その代り師匠の名跡は他の方法で

立てるやう豫定も已に出来てゐるので、事人事に關しますので申さぬ事とします。

話のついでに私の藝の系圖といつたものを書いて見ます。

初代竹本政太夫(さこば政太夫)——初代竹本綱太夫(平野屋嘉助)……………二代目綱太夫(竹本式太夫門弟京都ノ人、猪熊綱太夫ト呼ベル)——三代目綱太夫(京都ノ人、あめや綱太夫ト呼ベル)——四代目綱太夫(江戸堀綱太夫ト呼ベル)

竹本山城椽

五代目綱太夫(津島太夫ヨリ五代目襲名)  
六代目綱太夫(二代目職太夫ヨリ六代目襲名)  
七代目綱太夫(二代目津太夫ヨリ七代目襲名)

二代目古靱太夫(つばめ太夫ヨリ古靱襲名初代ト師弟關係ナシ)

給金の事をいふな。役不足をいふな。

が師匠のいましめです。ところが、私が今日までにしたつた一度だけ、この師匠の警めを破つて顔を争つたことがあります。それは大正四年の正月に私が

顔を争ふな。この三つは師匠から平生よくいはれてゐたことですが、その中でも顔を争ふなといふことは特に師匠がやかましくいひました。自分から他人に顔を争つてはならぬ、自分が他人から顔を争はれるやうになれといふの

南部(此間亡くなつた南部の先代)の端場を語らせられやうとした時のことです。南部はその時中将姫の雪責めの段を語ることにりましたが、私には

その前の座敷牢に役をふられましたので私は斷然抗議を申込みました。

私と南部は別に仲が悪いわけではなく、どちらかといへば兄弟子の津太夫などよりすつと懇ろにしてゐたのです。私は十二歳の時から文樂で生ひ立ち、南部は二十三歳の時に文樂に入つたといふわけで、文樂の太夫としては私の方が先輩なのですが、それが南部の端場を語らせられるのではおさまりかねます。こんな事が例になると、私は後日またどんな人の端場を語らせられるか知れたものではない。私の技倆がそれほど拙いといふ事なら、私としても大に考へなくてはならないから斷然芝居を休んでしまはうと決心しました。三味線の清六に相談すると清六も休むといふからいよゝゝそれとときめたところ、これを攝津大椽師匠がきいて非常に心配され、廣助(先代)師匠とも相談していろゝ斡旋された結果、南部の語るころは中将姫雪責の

段、私の語るところは豊成館の段、といふ風に別々に段割をして私の身分を立て、松竹からも今後は決してこんな役の割り方はほしくないといつてくれましたので、私も得心して出勤することになりました。かうして一件は落着きましたが、考へて見ると、前に申した私の師匠が、他人と顔を争ふより自分が他人に顔を争はれるやうになれといつた警め、その顔を争はれたのが南部で、争つたのが私といふことになる、これは明らかに私の負けです。が然し、何くそ南部に負けてたまるものかと、わりあてられた豊成館は非常な勉強を致しました。三味線の清六も一生懸命になつてくれましたお蔭で大へん好評を博し、その次の興行には一躍伊賀越の饅頭娘を語ることにになりました。

前に度々申した通り私は子供の時分から文樂に出てゐたのですが、この子ども太夫といふのは文樂では私が初め

なのださうで、最初大分問題になりましたのを當時文樂の顧問みたいな事をされてゐた山中安次郎といふ方が斡旋して納めてくれました。ところで私の初舞臺——といつても歌舞伎などちがつて太夫の玉子は昔からのしきたり通り、朝早く、お客も何も見えない時に、御簾うちで金切聲のありたけをしぼつて大序のくさりをがならせてもらふだけの事ですが——出しものは刈萱桑門筑紫のいへづと、石童丸の淨瑠璃だつたとおぼえてゐます。

この、太夫の玉子が大序を語る風景は今日では全く見ることの出来なくなつた滑稽な、且つ悲壯な風景でして、多ぜいの玉子が皆大序の文句をくさりづゝ語らせてもらふのです。その中でも顔の古い、シンの玉子が大序の大部分を語る。あとの連中は顔の順に従つて床本の紙三枚とか二枚とか、一枚、半枚、だん／＼下つて一口などといつた具合に聲を出させてもらふ。御簾う

ちはかうした連中が目白押にならんで、後から後からつめかけつめかけて、うけ持ちのくだりを語つては引下り語つては引下りしてゐました。これがすんでしまふとあとはもう芝居に何の用もないのですから一日ゴロ／＼してゐるわけですが、たゞゴロ／＼してゐるではありません。その間に師匠の用たしや床の茶湯くみなどしながら淨りをおぼえるのです。誰それ師匠のうち弟子になつて淨瑠璃の修業をしてゐるといつても、その師匠は何一つ教へてくれるわけはありません、稽古など頼んだらあべこべに叱られます。つまり教へてもらはうなどといふ根性がいけない、知りたければ自分の力でおぼえろといふのです。随分亂暴なやり方ですが、それでこそ他人に教へられた藝でない、ほんたうの自分の藝が出来るわけでもあると思ひます。だから一日中芝居にゐると、いろ／＼な名人上手の語り口を耳にして自然におぼ

えもし工夫もするやうになります。これは三味線ひきも同様ですから時々下つ葉の三味線と太夫がよつて樂屋で互に聞きおぼえの淨るりを研究しあつて見る、わからなくなると、翌日エライ人の語るのをきいてのみこむといったやうな事をやつたものです。いくらやつても出来ないやうな所はそれぞれ師匠の門を叩いて教を乞ふといふ事もあります、それにはどんなに道が遠からうが不便であらうが、朝早く暗がりから起きて出、師匠の家の起きない先から門口に立ち、戸がガラリとあくと同時に早うととびこむ位にしなくては稽古してくれません。それ程眞剣ならいふわけです。

こんな次第で、私どもにしては文樂全體を一つの學校のやうにして修業して來たものですが、あの床へ茶湯をくみ出す仕事、イヤでも應でも床の淨瑠璃をきいてゐなければならぬ、あの仕事をするのに三つの時代があると思

ひます、初めは無頓着に茶湯をくんで出してゐる時代、その次にそれがいやで耐らなくなる時代、そのうちに今度に進んでその仕事に當る時代が來ます。この最後の時代に入つて初めて太夫修業も本格になつたわけでもあるのです。

世の中が進んだといひませうか、悪くなつたといひませうか、今日の文樂では、かうしたわれ／＼の修業時代のやうな眞剣さ——或は不合理な、馬鹿げきつた眞剣さとも思ひますが——それが殆ど失はれてしまつたやうに思ひます。私にしては一抹のさびしさをおぼえざるを得ませんが、それも時代移りで致し方のない事でせう。

### 新企劃の若手興行

古典の殿堂「文樂座」にも新しい世紀の風が颯爽と吹き込まれて來た。——每興行の上演狂言が紋下の古靱太夫はじめ大隅、住太夫、相生太夫、呂太夫、織太夫、伊達太夫らの先輩によつて「一切場」が語られ、それ以下の濱太夫、つばめ太夫、雛太夫、松太夫など中堅級は常に數分乃至數十分ばかりの「端場」か、でなければ掛合の道行物に出演するに過ぎないといつた從來のやうな制度では次ぎの新しい世代の「文樂座」を背負つて立たねばならぬ若い人達の藝能修業に十分の効果を期することが出来ないといつた。若い惱みに、白井松竹會長が同情し先輩の古靱以下の賛同を得て、十月興行の終つた廿八日の「文樂座」を若手連に提供し演目は晝夜とも本興行の狂言をそのまゝ、然も各太夫の語り場はすつかり逆轉させた形で、古靱太夫と三味線の清六が「紙治」の端場を受持ち切場を濱太夫と市次郎（終）が語るといつた珍配役の公演を行ひ、若い人達の意氣を見せて識者の注目を惹いた。